フレンチ・インディアン戦争

北米フランス植民地は、先住民との交易によって富を得ることを目的に、商人が中心となって建設が進んだ。交易にとって重要なのは、物資を運ぶ水路であることから、入植地はまずセント・ローレンス河の要所に、続いて五大湖やミシシッピー河の要所に建設され、河を中心に内陸に広がっていった。

北米イギリス植民地は、農民が中心であった。彼らはまず大西洋岸の船が接岸できると同時に耕作に適した平地の広がる場所を探して入植し、そこから西へ西へと耕地を広げた。こうしてイギリス植民地は、入植者の増加に伴い東海岸から奥地へと拡大することになり、いつかはフランス植民地とぶつかる運命にあった。

イギリス植民地の入植者は、18 世紀前半に 20 数万人から 150 万人に増大した。この急激な増加によって植民地の西進も急速にすすみ、中葉には境界をめぐってフランス植民地との間に紛争が生じた。

イギリス植民者にとって、開拓地の獲得を阻むフランス勢力の打倒・一掃は、彼らの生存条件を左右する最も重大な問題であった。したがって、彼らの利害は、イギリス本国の利害と完全に合致し、植民者は、補給を担ったばかりでなく民兵を組織してイギリス軍を強力に支援することになる。

一方フランス植民地は、商人中心だったたため人口が少なく、開戦時、イギリス植民地の 20 分の 1 にも満たない 7 万人ほどしかいなかった。しかし、フランス側は、イギリス植民地と利害が衝突し敵対関係にあった先住民部族の多くを味方にして戦うことができた。つまり、この戦争はイギリスに対してフランス人と先住民が連帯して戦ったことから、フレンチ・インディアン戦争といわれることになった。

戦況は、当初フランス側に有利に展開したが、イギリス軍を支援する植民地民人口の圧倒的な優位性から、長引けばフランス側が不利となることは自明の理だった。

フランスは、このフレンチインディアン戦争の敗北によって、北米大陸に持つすべての植民地を失うことになった。

また、フランスとともに戦った先住民の運命も、これによって確定されることになった。先住民は、戦勝によって阻むものがなくなったイギリス人植民地の拡大にともなって、父祖伝来の土地を次々に奪われ、これに抵抗すれば開拓を邪魔する野蛮人として虐殺され、滅びの運命を甘受せねばならなくなる。

THE SEVENTH U.S. CAVALRY CHARGING INTO BLACK KETTLE'S VILLAGE AT DAYLIGHT, NOVEMBER 27, 1868.—[SEE PAGE 811.]

1868 年 11 月 27 日「ワシタ川の戦い」あるいは「ワシタの虐殺」Battle of the Washita or Washita Massacre
第 7 騎兵隊 503 人が、オクラホマ州ワシタ川付近に居住していたシャイアン族（約 250 人）を襲撃し、13～150 人（諸説がある）を虐殺した事件。